The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「職場教育」
Author(s)	桑原, 英之
Citation	臨床哲学のメチエ. 2002, 10, p. 14-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6307
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集１　分散する臨床哲学

「職場教育」

桑原英之

この分科会は、学生、社会人を交えて毎回６名程度の参加者で主に次の２つを目標としてたて議論を行った。

＜目標＞
次の２つを目標とした。

１．参加者がこれまでに受けたり或いは教えたりしてきた実際の職場教育について、幾つかの資料も参照しながらその内容・方法等について考えるとともに、何をどのように伝えているのか、という広義の教育の問題ともつなげながらその意味を考えてみる。
２．ソクラティックダイアローグ（ＳＤ）の職場教育での活用ということを大きな目標として、そのため様々な職場における職場教育の実体を調査し、その可否も含めて可能性を検討する。

＜論点＞
議論になった論点の幾つか提示する。

・職場教育における教育者の評価
・組織のルールと、個々人の裁量・判断
・マニュアル化できること、できないこと
・技術とわざ
・組織内コミュニケーション
・知ること、伝えることetc.

目標の２に掲げたＳＤの利用可能性については、現在の組織（企業からNPOまで）における職場内コミュニケーションの重要性や論理的思考、そして思考を言語によって明確にすることの重要性等々、一般論程度にはその可能性を指摘するに至ったが十分には議論できなかった。目標の１に関しては多様な論点が提示され活発な議論が行われたので、その中の１つをピックアップしてみる。

○　職場教育という「教育」
―　知ること、伝えること　―

この論点は特に医療やケアの現場を念頭に議論され、学校教育と職場教育の違い、或いは距離感から議論が出発している。学校教育で学ぶこととそれを具体的に行動に移す現場との間を、理論と実践

としてパラフレーズし、知と行為との乖離を取り上げる以前に、そもそもの知の位置付けをめぐる問題が議論された。例えば「学校で学ぶこと＝正しいこと」という固定観念のために、学校や教科書で学んだことと各現場での適切な対応の仕方に違いがあった時、必要以上に前者の知識に固執し、後者で要求されることへの抵抗がみられる、という、現場での経験が報告された。これに対しては「現場で使える知」を学校で教えていない、学校教育にたずさわる教師の現場経験、臨床経験の少なさ、といったことが指摘される一方、そこで必要とされる知の性格を単にプラグマティックな観点から批判するだけよいのか、という疑問も出された。そこで少し見方を変えて考えてみるならば、そもそもの知の在り方とその伝達を根本的に問い直す必要があるように思われる。これは恐らく医療という一領域の問題に限らず、今の学校教育と職場一般との間にもある問題ではないか。例えばそれは、我々が学校教育でとっている「知」の在り方、つまり明確な言葉としての「知識」として蓄積された知、そしてそれを言葉によって体系的に伝えるという知の教育の、伝え方の、その在り方そのものに関わってはくるものとして1度考えてみる、ということにつながるのではないか。職場教育における知のあり方とその伝達を考えてみると、学校教育の中ではうまく位置付けられないような方法がとられている。議論の中で出てきたのは「現場を知る」「まねる」「ぬすむ」「失敗する」etc. という形で知り、学び、伝える方法である。これらを知の中でどのように位置付けなおすことができるのか、という、知のあり方の問いへと結びつければ、単に職場教育だけでなく、教育一般を捉えなおすことになるかもしれない。

分科会での実際の議論は上述したような抽象的レベルで、すっきりしたまとまりをみせたわけではなく、参加者の具体的経験を下に錯綜しながら行われている。様々な意見が飛び交い明確な結論が出たわけではないが、職場教育で問題になっていることがほんの少しだが見えてきた。と同時にこれは目標2の、つまりSDが有効に活用できる場所を考えるための準備作業でもある。今後この議論を活かしていければと考えている。

（くわばらひでゆき）

木陰でのパネルディスカッション
（イギリスフォトアルバム２）